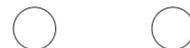


《凍雲篩雪図》から思うこと

守安 収

来年9月、「浦上玉堂と春琴・秋琴父子展(仮題)」を開催します。2006年に千葉市美術館と共同で開いた「浦上玉堂展」からちょうど10年、今回も同じ二館で頑張ります。▼さて、私が初めて玉堂さんの《凍雲篩雪図》(国宝 川端康成記念会蔵)を拝借したのは、1980年のこと。出品依頼のため鎌倉のお宅を訪ね、正座して奥様を待ちました。ところが、部屋の外から「お断りするから早いわよ」という声が聞こえ、愕然として動揺を隠せない私の前に、金茶色の着物姿の奥様が端座。挨拶を交わし、本題の展示の趣旨を説明し、必死に話題をつないで気がつけば結構な時間。「玉堂さんに里帰りしていただくのも良いわね」とのお言葉を賜り、ほぼ4時間に及ぶ正座という苦行の果てに、晴れ晴れと帰途についたという思い出深い作品です。▼今年の1月、私は福島県猪苗代町の「はじまりの美術館」にいました。詩人で映像作家の吉増剛造氏が《凍雲篩雪図》を前に自らカメラを回して独白したDVD作品「浦上玉堂の魂能(ノ)血(チ)が点々と 2014.7.26 岡山、東京」の完成記念上映会を催すためでした。そこでは2日間にわたり玉堂父子に関する講座や小展示も行いましたが、圧巻は吉増先生がDVDを上映しながらさらに画面に語りかけていく姿。見ていて胸が詰まりました。画家恐るべし、詩人恐るべし。心の微妙な動きと移ろいをすべて水墨の筆に託した画家と命を削って言霊を発する詩人とがコラボレーションする現場は、まさに時空を超えて得難い感動と発見をもたらす劇場となりました。来秋はそんな空間を用意して皆様をお迎えしたいと思っています。



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
 TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
 Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
 http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から
 ・徒歩約15分
 ・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
 ・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
 ・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
 「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース110号をお届けします。今号の表紙でご紹介している膝掛けは、岡山県赤磐市にあるレース・刺繍を手掛ける(株)サンキョウレースと、当館のミュージアムショップを運営するデザイン会社Cifakaによって、開館25周年にあたる2013年に製作されました。端を三角の形に沿って切り取られたこの製品は、裁断してもほつれないレース織りの高い技術を用いた優れたものです。秋から冬にかけての冷え込むこれからの時期、展示室内の監視業務において必需品となる膝掛けにも目を向けてみて下さい。

「美術館の紹介」vol.10

三角形が随所に見られる館内だが、監視員が使用する膝掛けにもその図形があらわれている。実用性に重きをおいた独自の製品だが、織りの調子を変化させながら、裁断の仕方によって印象を変容させられるなど、意匠にも拘りが見える。

微笑みの自刻像—木喰の自己成型

橋村 直樹(学芸員)



1. 木喰《自刻像》1807年 東光寺・兵庫県

江戸時代に全国各地を巡錫し、庶民に愛される数多くの個性的な神仏像を彫り残した円空と木喰。今夏、作仏聖として名高い二人の神仏像を紹介する「微笑みに込められた祈り 円空・木喰展」を当館で開催した。

鉦や鑿のあとの残る、鋭く力強い円空像と、表面を滑らかに仕上げ、丸みを帯びたヴォリューム感のある木喰像は、きわめて対照的な造形的特徴を有している。しかし、二人の神仏像はともに微笑みを湛えているものが多く、親しみやすさと神聖さという、相反する魅力が混然一体となっている点で共通している。

この展示会の準備段階から会期中を通じてわたしは、庶民信仰に根差した二人の神仏像の魅力を再認識し、それと同時に木喰が自刻像を繰り返し彫っていることに強く惹かれた。自刻像とは絵画でいうところの自画像であり、これまで木喰の自刻像は15体確認されている。木喰は56歳で「木食行道」として廻国の旅に出て以来、76歳で「木食(木喰)五行菩薩」、89歳で「木喰明満仙人」と名乗って三度改名しているが、「木食行道」時代の20年間の自刻像は1体だけで、あとは「木食(木喰)五行菩薩」時代以降に彫っている。「木食(木喰)五行菩薩」と名乗って以降、とりわけ80歳を過ぎてからは、様式的に完成する円熟期にあたり、木喰像全般に独特の笑みが現れてくる。この展示会では、木喰の故郷山梨県丸畑の四国堂にかつてあった、片膝を立てて瓢箪のある岩座に座る1体、新潟県長岡市金毘羅堂に秩父三十四所観音菩薩とともにあり、子どもの遊び道具として用いられたために顔面が磨滅した1体、京都府南丹市蔭涼寺にあり「木喰明満仙人」となって最初に彫った1体、兵庫県猪名川町東光寺に閻魔大王を含む十王像とともにある1体(図1)、さらに《十二神将》のひとりとして紛れ込む新潟県西光寺の1体(図2)と、計5体の自刻像を紹介した。それらは長い顎鬚を蓄え、顔面の磨滅した金毘羅堂の1体を除いてすべて豊かな笑みを浮かべており、さらに金毘羅堂、蔭涼寺、東光寺の3体には聖なる存在であることを示す頭光を備えている。こうした木喰の自刻像は、自らをキリストに擬えたデューラーの



《1500年の自画像》(ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク)や最晩年のレンブラントの通称《笑う自画像》(1665年、ケルン、ヴァルラフ・リヒャルツ美術館)といった西洋絵画における自画像を思い起こさせ、制作者が自らの姿をイメージ化する行為について改めて考える機会を与えてくれることになった。

西洋絵画における自画像は、形態や機能によっていくつかのタイプに分けられることが知られている*1が、おそらくわれわれが自画像として思い浮かべるのは、画家が自らの姿に対峙して本格的な作品としてイメージ化したもので、「独立型」に分類されるものである。他にも自画像のタイプには、物語的場面の端の方や画面の隅に画家自身を描いて制作者としての存在表明を行う「列席型」や、物語場面に紛れ込んで主要な登場人物や脇役に扮している「変装型」、あるいは自分自身をモデルとして身振りや表情を研究している「研究型」といったものもある。こうした自画像のタイプは、先の木喰の自刻像にも当てはめて考えることが可能だろう。つまり、瓢箪のある岩座に座る自刻像と「木喰明満仙人」となって初めての自刻像は自分自身の姿を中心に据えた「独立型」、秩父四十四所観音菩薩とともにある金毘羅堂の自刻像と閻魔大王を含む十王像を伴った東光寺の自刻像(図1)は、観音菩薩像群や十王像群の制作者として存在表明している「列席型」、そして《十二神将》のひとりとして紛れ込んでいる自刻像(図2)は「変装型」と分類できるだろうか。

ところで、人間が自己を統御し、成型する「自己成型 Self-fashioning」という考え方がある。これは、16世紀エリザベス朝の英国を例にとりながら、「人間のアイデンティティの生成について、これを操作可能で技巧的な過程と見なす自意識の高まり」をみとめた、スティーヴン・グリーンブラットの『ルネサンスの自己成型』*2によって広く知られるようになった概念である。以降、人文学の分野において「自己成型」の理論を応用した研究が見られるようになってきており、もちろん美術史における自画像／自刻像の問題にも適用可能である。

かつて四国堂にあった満面の笑みを浮かべている自刻像は、木喰が4度目の廻国修行を経て帰郷した際、丸畑や近隣の住人から懇願されて制作したものである。この像は、日本廻国の本願を成就した達成感と故郷の人々に造像を依頼された喜びの表れであり、グリーンブラットに倣って言えば、「達成者として」の「自己成型」とみなすことができるだろう。そして、頭光を備えた自刻像や十二神将のひとりとして紛れ込んだ自刻像(図1,2)は、菩薩行を実践してきた自信と自負の表れであり、他者に対して優しさと慈悲の心を持つ「微笑みの仏として」の「自己成型」とみることが可能ではなからうか。

自画像／自刻像を制作することは、自己を客観的に見つめることにほかならず、それには近代的自我の確立が欠かせないとされる。木喰は、近代以前の江戸時代を生きたが、「達成者として」、また「微笑みの仏として」自己成型しており、そういう意味では近代的な精神構造を持っていたといえるのかもしれない。

*1 西洋絵画の自画像のタイプについて、欧米の先行研究をわかりやすくまとめたものとして、三浦篤「西洋絵画と自画像—そのタイプと歴史について」(同者編『自画像の美術史』東京大学出版、所収)がある。

*2 Steven Greenblatt, *Renaissance Self-Fashioning: From More to Shakespeare*, University of Chicago Press, 1980; 2005(スティーヴン・グリーンブラット『ルネサンスの自己成型: モアからシェークスピアまで』高田茂樹訳、みすず書房、1992年)



2. 木喰《十二神将》部分 1805年 西光寺・新潟県

生誕100年記念 河原修平展

廣瀬 就久(学芸員)

河原修平(1915-1974)は倉敷市に生まれ、1933年に金光中学を卒業しました。その後上京し、川端画学校、太平洋美術学校で油彩画を学びます。1934年より東光会展に出品し、1937年より文部省美術展覧会(新文展)に入選しました。1944年には、疎開のため倉敷に戻ります。そして後の人生を、この地で過ごしました。戦後は東光会、岡山県美術展覧会に出品します。1947年には「倉敷素描絵画研究所」を開設し、1956年より「燈灰会」を主宰するなど、後進を導きました。

《峠道》[図1]は、第2回新文展(1938)の出品作ですが、自然と調和する日本の町なかを背景に、紺色の和服を着用した全身像で、自らを描いています。若い頃から晩年まで、河原は自画像に取り組みました。そして妻を描く《読書する女》[図2]や、母や妹、息子、祖父を描く作品など、家族の肖像を多く制作しました。

《峠道》、《読書する女》に先立って、1936年には沖縄を旅行します。岡山や東京と異なる、この地の風景と人物を描いた《南国の夢(A)》と《南国の夢(B)》(いずれも1936年、山田コレクション蔵)は、画業全体の中でも大作です。第5回東光会展(1937)で、この2点からY氏奨励賞を受賞するなど、転機を迎えました。

倉敷に帰ってからは、若い画家の指導に力を注ぎますが、1950年代後半(昭和30年代)から、人物画、静物画、風景画とも、作風が変遷します。晩年には、墨を用いた吉備路の風景画を制作するなど、移り変わりが見られるようになりました。

本年が河原の生誕100年になるところ、遺族、所蔵家、倉敷市立美術館のご協力を得て、画業を回顧します。「1.自分を見つめて」「2.家族への眼差し」「3.沖縄との出会い」「4.昭和20年代までの歩み」「5.昭和30年代からの展開」という5つの章に分けて、作品を紹介します。

フォーヴィスム(野獣派)をはじめ、シュルレアリスム(超現実主義)、キュビズム(立体派)を見ながら、日本人として独自の油彩画を目指そうとしました。そして岡山という地域に、油彩画の文化を根付かせようとした画業をご観覧ください。

本展に合わせて、河原と面識のあった、坂田一男(1889-1956)、小林喜一郎(1895-1961)、佐藤一章(1905-1960)、三橋健(1912-1977)などの作品を展示します。

おかやま県民文化祭参加事業／岡山カルチャーゾーン30周年記念事業

「生誕100年記念 河原修平展」

会期:2015年9月16日(水)-11月3日(火・祝)

会場:2階展示室

休館日:月曜日(祝日の場合は翌平日、ただし11月2日は特別開館)



1. 河原修平《峠道》1938年 岡山県立美術館



2. 河原修平《読書する女》1947年 倉敷市立美術館

あいまいな共感

古川文子(学芸員)



下道基行《Dusk/Dawn Thira/Siem Reap》2011年



隠崎麗奈《身支度》2015年
(撮影:柳場大)

岡山県新進美術家育成「I氏賞」では、これまでに大賞8名、奨励賞16名の作家が賞を受け、その後さまざまに活躍しています。また本賞の趣旨に基づき、受賞者の活動を支援し、ひろく皆さま方にご紹介するための展覧会を、2010年から当館で開催しています。

そんなわけで、事務局に携わりはじめた第5回以降の受賞者の方々とは、時おり連絡を取り合いながら、数年後の「受賞作家展」に向けて準備を進めています。この夏も、受賞者ふたりにお会いして近況を伺いました。

7月半ばに訪ねた隠崎麗奈^{*1}さんの個展(「資本空間 vol.3」gallery aM)では、色とりどりのキュートな造形美はもとより、《身支度》と題したモノトーンの新作の佇まいに心惹かれました。女性的なイメージが紡ぐ形態の圧倒的な存在感は、受賞当時から健在ですが、シックな大人の装いも加わり、さらに魅力を深めたように感じます。来年どんな作品が見られるのか、ますます楽しみになってきました。

今年11月の受賞作家展にご出品いただく下道基行^{*2}さんは、7月末の大原美術館美術講座での講師登壇(「シリーズ戦争と美術I まずは近代と戦争を考える」)、「他人の時間」展(国立国際美術館)・堂島リバービエンナーレ2015への出品等々、多忙なご活躍の合間を縫って、当館での展示計画も進行中です。国外に遺る鳥居を訪ね撮影した「torii」、地球上の二つの地域で同時に訪れる夕暮れと夜明けをテーマにした「Dusk/Dawn」のシリーズなど、時間や記憶の感覚を呼び覚ますような作品

は、私たちにも目の前の景物を見つめ直す機会を与えてくれます。

ふと立ち止まって周りをみると、人も物も情報も、高速で行きかう世の中の流れの中で、明確な説明や利便性を求める風潮に呑み込まれそうな怖さを感じます。誰もが頷く「共通認識」から淘汰された、美しさや懐かしさ、やるせなさ…といった曖昧な感覚を振り所に、意思疎通の感度を高めるような交流も必要なのでは?我々の脳には生まれつき、相手のしぐさや感情を映し、細胞レベルで共感する機能も備わっているのですから。素敵な「雰囲気」を形に込める隠崎さんの彫刻や、日常的な事物のなかに在る過去を視覚化する下道さんの手法は、論理的な輪郭を定めない大切な感覚を伝えていきます。

「I氏賞受賞作家展」も、このたびで五回目となります。受賞前後の数年間ではありますが、彼らと共有した時間の感覚が、展覧会の気色につながれば何よりです。

※1 第5回「I氏賞」奨励賞受賞者 1977年瀬戸内市出身

※2 第6回「I氏賞」大賞受賞者 1978年岡山市出身

「第5回I氏賞受賞作家展 加藤竜・下道基行」

会期:2015年11月6日(金)-12月13日(日)

会場:2階展示室

休館日:11月11日(水)16日(月)30日(月)、12月7日(月)

特別開館:11月9日(月)、24日(火)

新収蔵品紹介

File 06

明治の彫刻家 井上鶴峯
福富 幸(主任学芸員)



井上鶴峯《雛御殿》1917年

昨年度、当館のコレクションに加わった本作品は、これまでも何度か展示したことがあるので既にご存知の方も多と思います。先の御所蔵者は故小野年之初代館長と親交のあった方で、小野館長からいずれば県へと言われていたそうです。御自身も高齢になられ、かつての約束を果たしたいというお申し出でした。30年近くも前の約束です。美術館の活動がきちんと継続・継承されている、ということの大切さを感じました。

井上鶴峯(1850-1919)は現在の瀬戸内市邑久町尻海の出身で、父錦海(1815-1892)、長男仰山(1886-1965)とともに宮大工、彫刻家として活躍しました。大きなものでは隔年で5月4日に引き回される尻海のだんじり彫刻に力強くダイナミックな彫技を見ることができます。「賤女業置物」は膝に猫をのせていたり、赤ん坊に乳を含ませていたり、籠に入れてそばに置き仕事をする女たちのありふれた日常の情景を写し取っています。また「雛御殿」は大正天皇の即位記念として制作された内裏のミニチュアで、本格的な建築の立て組みや2cm程の小さな人物の姿態や装束が細かく表現されています。

これらはこの秋、備前の細工物とともに徳島県立近代美術館で開催される「フィギュア展—ヒトガタ、人形、海洋堂—」(会期:10月3日-11月29日)に100年前のフィギュアとして出品されます。



井上鶴峯《雛御殿》部分 1917年



井上鶴峯《賤女業置物》1902年

展覧会スケジュール

